



プラネティストが行く 14

## インドのカーストを 破壊する3つの力

中村 繁夫

写真・桃井和馬 野田雅也

「ジャイビーム！ ジャイビーム！」。ど迫力の声が東京・護国寺の本堂に響き渡った。この第一声で、護国寺の本堂に溢れかえった500人以上の聴衆が、魅入られてしまった。講話は正味3時間にわたったが、埋め尽くされた本堂は、水を打ったような神妙な空気がなっていた。4年ぶりに帰国した佐々井秀嶺師（アーリア・ナーガルジュン・ササイ）が、6月7日に護国寺で最終講話をした時の話である。インドの最下位カースト・ダリット（不可触民）の1億人以上を、仏教徒に改宗させたニューブディズム運動の先導役として布教活動に半生を捧げた佐々井師は、今やインド仏教界の最高指導者としてカースト制度を宗教面から変革させようとしている。

佐々井師の面影は、36年前と何も変わっていない。私はこれほどまでにブレのない人も珍しいと思いつつ、大音響のタミ声を感じ無量で聞いていた。私が初めて佐々井上人と会ったのは、1973年のビハール州ブッダガヤであった。私が寝泊りしていたチベットテントに、佐々井上人が入って来られたのである。夜を通して上人の話に聞き入った。アンベードカル博士が、ガンジー首相と対立した話からダリット解放運動に至るまでの話を、講談のような迫力で夜を徹して聞かせていただいたのである。当時のインドは、物乞いの子どもの目が潰れていたり、両手が切られていたり、信じられない光景が見られた。子どもの親が物乞いをしやすくするために「手を掛ける」というのである。「慈悲を得るための手段」であると聞いてダリットたちの生き抜くための残酷さを知らされた。

さて、今年のインド総選挙では、下位カーストの動向が注目され

た。インドの有権者の6割が下位カーストであり、ダリットだけでも2割弱の勢力と言われている。総選挙でインドのオバマになるのではないかと言われたのが、大衆社会党(BSP)のマヤワティ・クマリ党首だ。彼女はダリット出身で、上位カーストから見ると政治的に「アンタッチャブル」な存在であった。

総選挙は、中央で連立与党を率いる国民会議派と野党インド人民党の2大政党を軸に争われたが、2大政党以外の小政党が結集して政権をつくろうとの動きもあり、その場合マヤワティ氏は、最有力の首相候補であった。結果は辛くも国民会議派が勝利したが、次回の選挙では下位カースト票が命運を決めると言われている。マヤワティ氏はカースト制度を政治の世界から変革させようとしているダリット出身の政治家である。

インドのカースト制度を破壊するもう一つの勢力がある。それは経済のグローバル化とデジタル革命である。今や米国のIT産業では多くのインド人SE(システムエンジニア)が活躍している。下位カースト層が猛勉強してSEとして米国に移住しているが、米国のソフトウェア産業は、インド人技術者なしでは稼働しない状況にまでなっている。ダリットの技術者も激増しているので、デジタル革命がカースト制度を自然消滅させてしまうのではなからうか。

話は護国寺の佐々井師の話に戻るが「何故、上人はそんなに元気なのか？」と問うと「信念、使命、自覚が行動の源である」。「インドの仏教で瞑想はするのですか？」との問いには「ニューブディズム運動は戦いの宗教です。瞑想はしません」。そして、講演の最後には、聴衆も一緒になって拳を挙げて「ジャイビーム」を連呼しはじめた。「ジャイビーム」とは仏教中興の祖、アンベードカル万歳といった意味である。プラネティスト佐々井秀嶺師の新しいインド変革の姿を現代の日本人は刮目して見るべきである。

〔なかもむら・しげお〕1947年生まれ。レアメタル専門商社・アドバンストマテリアルジャパン(AMJ)社長。近著に『レアメタル超入門』(幻冬舎新書)。  
〔ももい・かずま〕1962年生まれ。フォトジャーナリスト。現在、地球写真プロジェクト「Eyewitness」を展開中。



人々の熱気が漂うインド都市部の雑踏(当頁・桃井)。

インド大陸を行脚してきた佐々井師の足は、肉厚で銅のような皮膚に覆われている(前頁・野田)。